台風18号

災害発生日●平成16年9月4日～8日
主な被災地●北海道・中国・四国・九州地方

暴風が大地を引き裂く 全国に被害を残した風台風

**記録的な強風で、日本を駆け抜けた台風18号。
厳島神社では一部がばらばらに壊れ、北海道ではポプラ並木が
倒壊するなど、風の恐ろしさをまざまざと見せつけられた。
しかも、台風16号が通過してから約１週間後の襲来だったため、
復旧に手を付けたばかりの被災地は、二重の被害を受けることになった。
人的被害は死者41人、行方不明者4人、負傷者1365人。
住家被害は全壊132棟、半壊1396棟、一部破損6万5065棟。**

民家から世界遺産まで 暴風は見境なく破壊する

9月5日に沖縄県、同7日に長崎県に上陸した台風18号は、日本海沿岸を北上し、全国に大きな被害を与えた。

この台風の大きな特徴は、記録的な「風台風」だったことである。大分県日田市、広島県広島市、島根県隠岐島、北海道室蘭市など全国18箇所で、最大瞬間風速の記録を塗り替える強風となった。中でも広島市での最大瞬間風速は60.2mを記録した。

西日本を中心に各地で猛威を振るった強風によって、人や車両の転倒、家屋や並木の倒壊などがあり、負傷者、死者が続出した。飛んできた瓦が頭に当たった男性が死亡（島根県江津市）、強風で転倒して男性が死亡（広島県美東町）、突風で5m飛ばされて女性が重体（愛媛県新居浜市）、小学校でガラスが割れて、トラック2台が横転（高知県須崎市）するなどした。

被害を受けた船舶も多い。山口県下松市の沖合ではインドネシア船籍の貨物船が、広島県廿日市市ではカンボジア船籍の木材運搬船がいずれも沈没したほか、高知市では停泊していたパナマ船籍の大型貨物船が海岸に座礁した。

台風18号と瀬戸内海の満潮時が重なったこともあり、高潮の被害も大きかった。高松市は5万4300世帯に避難勧告を出した。四国のほか、広島県、岡山県、兵庫県など数多くの地域で冠水、浸水があった。台風18号は、台風16号が去ってわずか一週間ほどで到来しただけに、前の台風の後片づけも終わらないまま避難した地域も多く、地域の不安、負担を一層高めることになった。

世界文化遺産である厳島神社（広島県宮島町）も大きな被害を受けた。1168年（仁安3年）に平清盛が社殿を寄進してほぼ現在の形になったといわれる厳島神社は、杭を打たず、海上に建築物を置くような独特の構造をしているが、最近では1991年9月（台風19号）の被災をはじめ、これまで幾多の風水害に遭いながら生き残ってきた。今回の台風18号の襲来時も、取り外し可能な床板を外したり、土のうを積んだり、従来と同じ対策は打っていた。

ところが、台風18号の強風と高潮は予想以上だった。国宝の左楽房（雅楽を演奏するための建物「楽房」のうち、西側に位置するもの）が倒れ、屋根ごと海に浸かった。また、同じく国宝の祓殿の桧皮葺き屋根の一部がはがれた。これらを含め損傷したの

▼山口県笠戸島沖で座礁したインドネシア船籍の貨物船船首部分〔写真提供／共同通信社〕

▼強風で国宝が破損した厳島神社〔写真提供／読売新聞社〕

は国宝18棟と重要文化財12棟で、修復費用は7億9000万円に上った。厳島神社回廊の冠水の回数は近年急激に増えていて、今後も油断できない状態といえよう。

農林水産業への被害も大きく、中国地方5県を合わせた被害は170億円を超えた。カキ養殖用いかだの流出、ナシやミカンの落果、水稲や野菜への被害などによるものだ。

暴風域を拡大して再上陸 北海道を襲った暴風被害

さらに台風18号は従来の常識を破り、勢力を保ったまま北海道へ向かった。暴風域が道全域を覆うほどの規模に拡大して9月8日、再上陸した。最大瞬間風速は札幌市で50.2m、室蘭市で45.7mを記録した。札幌市では、北海道大学の観光名所でもあるポプラ並木をはじめ街路樹が倒れた。札幌市緑の保全課によると、10日までに市内の街路樹3000本以上が倒れているのが確認されている。また、後志支庁管内の神恵内村では、台風による高波で国道229号の大森大橋の3分の1、全長429mのうち158mが落下し、3つに折れた。台風18号による道内の死者は8人、負傷者は400人以上に及んだ。

▲高波で橋げたの一部が落下した国道229号の大森大橋（北海道神恵内村）〔写真提供／北海道開発局〕

【インタビュー】
INTERVIEW

防災よりも復旧・修復に主眼を置く

～自然災害を受け入れるしかない世界遺産の宿命～

厳島神社　禰宜（ねぎ）
飯田楯明氏

台風18号によって戦後最大級の被害を被った厳島神社。
これまでの被災経験で学んだ教訓・知識は生かせるのだが、特別な防災手段をとることはできない。文化財であり、現状を変えるようなことはできないからだ。
800年の歴史をくぐり抜けてきた神社は、生き物が傷を癒やすように、破損を修復し、歴史を重ねている。

●歴史上、何度も被災した経験を持つ厳島神社ですが、特別な防災方法はあるのですか。

自然に人間の力は及ばないもので、台風が来たら防ぎようがないというのが正直なところです。台風がいつ来るか、どんなコースをたどるかで被害は全く異なりますから、防災訓練などもしていません。ただ、これまでの経験から蓄積された手段はとっています。例えば、平成3年の時は能舞台が下から吹き上げる風で持ち上がって落下して破損したので、今回は鏡板を外し、風が抜けるようにしました。そのほか、建物に支柱用の棒を入れたり、土のうを積んだりなどはしています。台風18号のときは、襲来の2時間ほど前から職員30人から40人で対応しました。

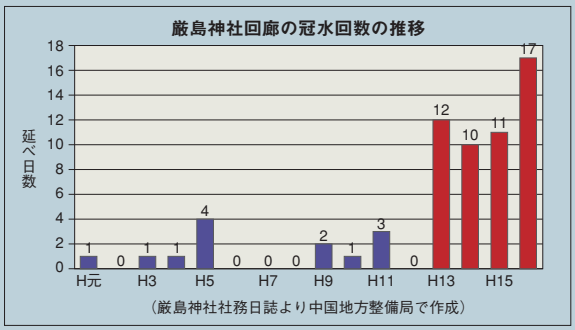
●今回の台風被害の特徴は何ですか。

当日は満潮でも潮位が2.76mと低かったのですが、実際には潮位が1.70mも膨らみ、廻廊の床上50cmにも達して、そこに強風と高潮が襲ってきました。今まであまり例がないことですね。床板（平舞台）は動いて破損しました。ただ、この部分には消波的な効果もあるようです。左楽房は破損してばらばらになり、右楽房は人力で綱で引いて流されるのを止めました。全37棟のうち破損は30棟にも及びます。

●防災面で難しいのは、どのような点ですか。

文化財なので、平安時代からの状態を維持し、景観にも配慮して守らなければならないことです。厳島神社は潮位が最も高い4mくらいの時、床板が海面よりぎりぎり上になるように設計されています。例えば、これをもっと上げれば被害は減るかもしれませんが、文化財にそうした工事を施すことはできません。景観を損ねてもいけませんから、防風のための障壁などを建設することもできません。ですから、防ぐというより、破損した後、どう修復するかをより強く意識しているといえるでしょう。

今度の被災で流出した部材の90%以上が回収され、屋根を葺くための桧皮なども確保しました。修復は、京都にある社寺建築の専門企業に依頼しています。



▲厳島神社回廊の冠水回数は近年増加している〔資料提供／中国地方整備局〕